

〈指導教員推薦文〉

社会学部 教授 島 村 恭 則

那須くらら『『困窮島』という神話－愛媛県二神島／由利島の事例－』

推薦理由

民俗学に「困窮島」という概念がある。これは、離島社会において、「本島」で生活に困窮した者が、付近にあるより小さな島（「属島」）に開拓に行き、一定の経済的安定を回復した段階で「本島」に戻ってくるという貧民救済の「制度」に対して民俗学者が設定した概念である。

本研究は、かつて民俗学者の宮本常一によって「困窮島」制度が存在しているとされた島の一つである愛媛県忽那諸島の二神島（とその「属島」である由利島）をフィールドに、実際に「困窮島」制度がいかなるものとして現地に存在していたのか、あるいはそもそもそうした「制度」は本当に現地に存在していたのか、という問題関心を持って現地調査を実施したきわめて実証的な研究である。

現地調査による検証にもとづき、著者は、現地には「制度」としての「困窮島」は存在せず、時代ごとの状況により人々が「本島」から「属島」へと渡り、そこで開拓を行なうという「移住開拓」の実態があったにすぎないこと、を明らかにした。そしてその上で、そのような実態があったにもかかわらず、宮本常一がこの島を「困窮島」制度の島と位置付けたことについて、離島振興を掲げて活動していた宮本常一にとって「困窮島」という概念は非常に魅力的なものとして存在しており、彼は日本中を歩くなかでその概念が適用できる島がないかと探していたのではないかと、そしてその過程において見出された島の一つが由利島だったのではないかと、という推論を行なっている。

「困窮島」については、近年、民俗学者の野地恒有が、「困窮島」なる制度の存在を疑問視し、「移住開拓島」という新たな枠組みで現象を把握すべきであるという問題提起を行なっている。ただし、これはあくまでも理論的検討の次元で提示されている議論であり、この問題意識のもとで現地調査にもとづく検証を行なった研究成果はいまだ存在していない。こうした状況の中で、現地での実地調査により「困窮島」概念の見直しを提起した本研究は、民俗学の研究動向の上でも重要な意義を持つ研究であると評価でき、卒業論文の水準としては高いレベルにあるものと判断する。

もっとも、これはあくまでも卒業論文としての水準について述べているものにすぎない。一般的な学術論文として評価した場合には、事例の記述のあり方や論の構成に甘さが見られるし、文章表現も稚拙である。そこで、本来ならば、何度も書き直し作業をさせてから、本紀要に掲載すべきだということに当然だろう。

だが、著者は、すでに大学を卒業し民間企業で勤務しており、多忙な勤務の日々の中で、論文のブラッシュアップにかける時間がなかなかとれない状況にあった。そのため、やむを得ず、最低限の手直しのみでここに論文掲載をすることとなった。この点、安田賞への推薦を行なったゼミ指導教員としては忸怩たるものがあるが、今回は、あくまでも、学部学生が精一杯取り組んだ卒業論文を公にするという趣旨で、ここへの掲載も推薦するものである。